

コミュニティ開発 Letlhakane（レタカネ） 平成25年度3次隊

JOCV 平成25年度3次隊、圓山佐登子です。コミュニティ開発という職種で、南部アフリカにあるボツワナで、2014年1月から活動をしています。私は現職参加という制度を利用し、日本で勤めていた会社を2年間休職し、JICA ボランティアに参加しています。

配属はセントラル州ボテティ郡に配置されているカウンシル（いわゆる村役場）です。ここの Community & Development という地域開発を担当する部署に所属しています。この部署では管轄地域であるボテティ郡に点在する村々の自治をサポートし、生活上様々なプログラムを提供しています。その中で私の要請は特に遠隔地に指定されている村で収入創出（Income Generation）活動を行うという内容です。現在3名の JICA ボランティアが同じ要請で、同配属先に所属しています。そのうちの2名のボランティアでクラフト製作販売による収入創出プロジェクトを立ち上げ活動をしています。

・活動について



現在私たちのプロジェクトは配属先から約200キロ離れた Xere（ツエレ）村を対象として3名の女性と活動しています。この村の人々は元々南部アフリカにあるカラハリ砂漠に住み、狩猟採集で生活していたバサルワ民族（通称ブッシュマン）が多く、ボツワナ政府の政策によって指定地域に定住化を勧められた人々です。そのため、多くの人々は政府の保護で生活しており、村に仕事はほとんどありません。そういった村が配属先の管轄には4つほどあり、政府は彼らへの特別なサポートプログラムを提供しています。私たちのクラフトプロジェクトもそのプログラムの一環となっています。

具体的なプロジェクト活動としては、南部アフリカ伝統生地 German Print を使ったバックやアクセサリを作って販売しています。立ち上げりの商品製作技術は比較的スムーズに進みました。その理由としては実はバサルワ民族は、天然素材（ダチョウの卵の殻など）を使ったアクセサリなどをつくる風習があり、手先が器用だったのです。しかしながら、市販するための品質を維持する根強い指導が必要であり、現在も日々品質向上に取り組んでいます。

また、地元の人向けの販売では市場に限られ、なかなかメンバーへの利益還元ができません。そのためボツワナ国内の旅行者や首都向けに販売しようとマーケティング展開しています。観光地のロッジや首都の民芸品店をパートナーとして提携できないか現在取り組んでいます。

そのようなマーケットの獲得するためにも、プロジェクトが今後ビジネスとして運営していくための基盤作りが必須です。しかしながら、市場から遠い、電気もない村ですべての業務オペレーションを行うのは難しいので、他からの協力が必要です。そういった支援を得るために関係団体や個人への営業活動も並行して行っています。

マーケティングと基盤作り2つが私たちの活動の中心となっており、我々ボランティアがいなくなったあともプロジェクトが継続し、少額でも安定した収入源となることを活動の最終目標にしています。

・ 現地での生活

私の配属先のレタカネは首都から約 600 キロ、長距離バスで約 6 時間の村です。周辺にはボツワナの主要産業であるダイヤモンドの鉱山が多数点在しているので、人口は多く、比較的生活環境が整っています。

一方でプロジェクトの展開している遠隔地の村々は、ブッシュの中を未舗装の道で数十キロ行ったような場所にあり、もちろん電気は通っていませんし、お店もありません。人々の話す言葉も現地語が主流であり、英語はなかなか通じません。

ボツワナはアフリカ諸国の中では比較的安定した経済と政治に支えられ、特に首都圏はいわゆる開発途上国のイメージとはかけ離れています。しかし、同じ国内でも、住んでいる場所や育った環境によってかなり違いがあります。

なので、ボツワナの生活を一言で言い表すことはできませんが、多くのボツワナ人に共通するのは、ゆったりと構えてどこか楽観的なところでしょうか。現地の人とともに活動すると、やはり考え方や進め方が違うので、なかなか思う通りには物事は進みません。時間がかかったり、空回りしたり、コミュニケーションがうまくいかなかったり。そんな時私が深刻な面持ちで座っていると、それを見たボツワナ人に、「なんでそんな難しい顔しているんだ。そんなに悩むな！ ‘Let it be’だ」と言われます。彼らの生活は日本のように便利ではないし、仕事がなかったり、お金がなかったり、うまくいかないことはたくさんあると思います。しかし、彼らはあまり深刻にならず、「なんとかなる、今日も平和で元気なのが一番」というかんじで Happy に生きているように見えます。

そんなおおらかなボツワナ人との生活は効率が悪いことも多く、なかなかストレスフルな場面も多いですが、縁あってボツワナにやってきたので、この ‘Botswana Style’ をうまく自分にも取り入れての残りの任期も Happy に過ごしていきたいと思います。

